痕跡

ふるえを知る者には
生を逃亡の中に駆け抜けることはできない
たとえ俯いたまま歩こうとも

怖れの故に身を寄せ合うものは少なく
嘘を創造するために産み出した美辞麗句には
ああ、何と蟻の如く人々はたかることか

　　静謐の中にこの指輪を贈るとき
　　かすかな想いは生活によって———
　　ああ、どこへ消え去るものか

人々は街に蹴りを与え
街は風を拒み
風は人々を無視して通り過ぎる

ひっそりと僕の肩を抱いていた旋律は
白日の下に引きずり出され、無残にも
原色の絵具で塗りたくられてしまった

　　小さな自転車に窮屈にまたがると
　　空は心なしか高く見え
　　道のりは果てしなく、そして期待に満ちていた

　　僕は慄えながら感じていた
　　この小さな世界にも無数の空間があり
　　駆け抜けることのできぬ果てしなさがあると

人々は己を押し込めるべく努力を重ねていた
則ち自ら造り出した純粋な成分のみの世界へと
息苦しさに喘ぎながら・・・
則ち自己保存という息苦しさに
逃亡に逃亡を重ねながら・・・
則ち被造物たる自身からの逃亡を図るために

　　このアスファルトの道にも
　　この新しいデザインの家々にも

このいかつい鉄骨造りの駅にも
既に染み込んではいなかったろうか
無数の喘ぎと逃亡の疲労が
あの弱弱しいふるえに満ちた呟きが

ああ世界よ
僕にだけは
そう―――、僕にだけは血を流すがいい
怖れという血を
流すがいい

(1992.9.14)